

# 天馬の記

劇作家

大耕岡部

⑮

亮雄和尚は城山の「石童丸」伝説の話をよくしてくれた。石童丸の父重氏は世情の無常を感じ、城山を捨て紀州高野山で仏門に帰依する。その子石童丸は父を慕って紀州高野山に登るが、父とは名乗らない僧の弟子となり一生を送った。この物語は今年の星鹿小学校民話ミュージカルにするつもりでいる。

父は星鹿になじもうとしていた。浄土寺に幼稚園を開園したのも、父やそのグループである。

私が幼稚園児になる年代になったこともあるのだろう。昔は幼稚園といえばお寺であった。「ゆりかごから墓場まで」と言えなくもない。あの時代の星鹿は、暮れや正月は消防団の半纏を羽織って、一升瓶をぶら下げた男

## 白いライオン追い

く違つ。島原の言葉は鹿児島磨き粉の話ではない。伝説の白いライオンが泣くと、涙は雨に縁があるのかもしれない。長崎市から島原へ向かう土地の茶褐色の土の色はアフリカの土の色によく似ている。30年前、アフリカにはシナハンでいった。ロビへ渡った。

の人が闊歩していた。父は消防団に入っていないかった。やはり、土地の人ではなかったのだから。「島原に行ってみたか」が口癖であった。

島原市は長崎県の県南にある。同じ長崎県でも県北と県南はまったく違つ。言葉もまったく違つ。言葉もまったく



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

れていっばいであった。あっちこっちにはキリンもいた。ナイロビからはジープで現地の人も入らないような奥地に入った。サファリである。

サファリはジョン・ウエイン主演で映画にもなった。「ハタリ！」である。ナイロビのホテルには「ジョン・ウエイン」パーもあった。椅子が高過ぎて座れなかった。奥地に入ると、平原で腰に布を纏っただけの少年が、棒つきれひとつを持って羊の群れを追っていた。2カ月間、アフリカに滞在した。インドではガンジス川でも遊び、ぼろぼろになって帰って来て、家内には「すぐに風呂に入ってください」と急かされた。(松浦市出身)